



Title	Psychological characteristics of eating disorders as evidenced by the combined administration of questionnaires and two projective methods-the Tree Drawing Test (Baum Test) and the Sentence Completion Test (SCT)
Author(s)	水田, 一郎
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43197
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	水 田 一 郎
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 5 5 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 13 年 10 月 29 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	Psychological characteristics of eating disorders as evidenced by the combined administration of questionnaires and two projective methods-the Tree Drawing Test (Baum Test) and the Sentence Completion Test (SCT) (質問紙と投映法検査 [バウム・テスト、SCT] による摂食障害の心理学的特徴の検討)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 武 田 雅 俊 (副査) 教 授 杉 田 義 郎 教 授 井 上 洋 一

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

質問紙と投映法検査を組み合わせた心理検査バッテリーによって、摂食障害の心理学的・精神病理学的特徴を明らかにすること。これまでの摂食障害研究において殆ど用いられることのなかった投映法検査の意義を検討すること。

【方法】

1996年5月～2000年5月の間に大阪大学医学部附属病院神経科精神科を受診した摂食障害患者165名のうち、15歳以上30歳未満の女性患者126名を患者群、患者群と年齢・性別をマッチさせた健康な被験者54名を対照群とした。患者群と対照群の双方に対して、3種類の質問紙(EDI、SAS、SCU-R)と2種類の投映法検査(バウム・テスト、SCT [文章完成法])を施行した。EDIは摂食障害に特徴的な心理的傾向を測定するためのもの、SASは全般的社会適応のレベルを評価するためのもの、SCU-Rは摂食関連行動・身体医学的問題・摂食障害のリスク・ファクターと考えられている諸因子について尋ねるものである。バウム・テストとSCTは、精神科臨床においてよく利用されている、比較的簡便な投映法検査であり、患者の自己像や気分状態、対人関係のあり方、環境との関わり方などについての情報を与えるものである。結果の分析は、患者群をDSM診断によって分類し、うち3群(神経性無食欲症制限型[ANR]、神経性無食欲症むちゃ食い/排出型[ANBP]、神経性大食症排出型[BNP])と対照群の間で4群比較を行った。

【成績】

摂食障害患者のうち、浄化行動(自己誘発性嘔吐、下剤乱用など)を示す2群(ANBP、BNP)と対照群は、質問紙と投映法検査のいずれによっても明確に区別された。まず、質問紙に関しては、3種類の質問紙の全てで、これら2群は、対照群に比べ、より問題の多い結果を示した。すなわち、EDIでは痩せ願望、身体に対する不満、無力感、完全主義、対人不信、内的感覚の混乱、成熟恐怖、禁欲主義、衝動統制の悪さ、安全感欠如などの傾向、SASでは社会適応上の困難、SCU-Rでは自殺念慮・企図、幼少期の両親との否定的関係、幼少期の分離・喪失体験などが、より顕著に認められた。次に投映法検査に関しては、バウム・テストでは、よりサイズの小さく、エネルギーの乏しい木を、画用紙の、より左方に描いた。SCTでは、肯定的な文章をより少なく、否定的な文章をより多く書いた。これに対して、浄化行動を示さない1群(ANR)と対照群の間、および浄化行動を示す2群(ANBP、BNP)の間では、質問紙と投映法検査のいずれにおいても、有意差はほとんど認められなかった。ただし、一貫した傾向と

して、質問紙と投映法検査のいずれにおいても、ANR は対照群と ANBP、BNP の中間的な位置を占めた。

【総括】

本研究の対象となった若年女性の摂食障害患者のうち、浄化行動を示す2群（ANBP、BNP）は、同年代の健康な女性（対照群）に比して、極めて異なった心理学的・精神病理学的特徴を持っていた。これに対して、浄化行動を示さない1群（ANR）と対照群、および浄化行動を示す2群（ANBP、BNP）の間には、殆ど有意な差が認められなかった。摂食障害の心理学的・精神病理学的特徴を検討する上で、摂食障害を全体として見るだけではなく、病型別に検討することが重要であると考えられた。臨床的な印象に反して ANR と対照群の間に殆ど有意差が認められなかった一つの理由として、ANR 群の患者に特徴的と言われる心理学的“否認”の機制が、病気や身体状態の深刻さの否認のレベルを超えて、患者の心的態度全般にまで広がっている可能性が考えられた。質問紙と投影法のいずれにおいても、ANR が対照群と ANBP/BNP の間に位置するという比較的一貫した傾向が認められたが、投映法検査の幾つかの項目（バウム・テストにおける描画細部の特徴の一つである“一線枝”、SCT における“空欄”回答項目）については、この傾向が逆転し、ANR が対照群から最も離れた距離にあった。このことは、ANR の“否認”や、“否認”と関連した自我の未熟性を反映しているように思われた。この例にみるように、投映法検査は、質問紙だけでは知り得ない摂食障害の心理学的・精神病理学的特徴を明らかにする可能性を秘めた評価手段と考えられた。今後の研究に投映法検査を積極的に用いるためには、本研究で採用したフラクタル法を始め、投映法検査の客観的・定量的な評価手段の更なる開発と洗練が必要と考えられた。摂食障害は、経過中にしばしば病型が変化する（たとえば ANR→ANBP、BNP）ことが知られている。今後は、本研究のような横断的研究だけでなく、縦断的研究も組み合わせることによって、本研究の知見の信頼性や妥当性について、引き続き検討を重ねていくことが必要と考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、質問紙と投映法検査を組み合わせた心理検査バッテリーによって、摂食障害の心理学的・精神病理学的特徴を検討したものである。本研究は、摂食障害患者のうち、浄化行動を示す二群（神経性無食欲症－むちゃ食い/排出型 [ANBP]、神経性大食症－排出型 [BNP]）が、健常対照群と極めて異なった心理学的・精神病理学的特徴を持つこと、浄化行動を示さない一群（神経性無食欲症－制限型 [ANR]）と対照群の間、及び浄化行動を示す二群間には類似点が多くみられること、ANR が対照群と ANBP/BNP の中間に位置するという一貫した傾向が認められることなどを明らかにした。また、これらの一貫した傾向に対する数少ない例外が、投映法検査においてのみ認められることを明らかにした。

本研究は、摂食障害の心理学的・精神病理学的特徴を理解する上で、摂食障害を全体として見るだけではなく、病型別に検討することの重要性を明確に示した点、及び、質問紙だけでは明らかにできない摂食障害の心理学的・精神病理学的特徴を、投映法検査が明らかにできる可能性を示唆し、摂食障害研究における投影法検査の意義を明らかにした点において、極めて優れた研究であり、博士（医学）の学位授与に値すると考えられる。